



Title	東郷語の音韻体系
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 1995, 13, p. 31-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東郷語の音韻体系

角 道 正 佳

Phonemic System of the Dongxiang Language

KAKUDO Masayoshi

0. はじめに

中華人民共和国甘肅省臨夏回族自治州東郷族自治県を中心に居住している東郷族の言語には三つの下位方言¹⁾はあるが、方言はない(劉照雄(1981: 4), 布和(1985: 16))といわれているにもかかわらず、記述のばらつきが研究者間に存在する。同じ研究者でも違う箇所違った記述をしていることがあり、さらに、同一書物の内部で矛盾する記述をしているものもある。今仮にТодаева(1961), 孫竹主編(1990)『蒙古語族語言詞典』, 布和(1988)『東郷語詞彙』, 阿・伊布拉黑麦(1988)から例を拾うと以下のような記述のばらつきがある。ABCD はタイプの違いを表す。ABCD は4つとも違うという意味である。本稿の目的はこういった混乱を整理し各資料がどのような性格を持っているかを明らかにすることにある。

	(1)	(2)	(3)	(4)	
1 2 3 4	Тодаева ²⁾	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語詞彙』	阿・伊布拉黑麦	
AAAB	sa <u>gi</u> -	sa <u>yi</u> -	sa <u>xi</u> -	sa <u>xi</u> -	待つ
AABA	ja <u>n</u>	ja <u>n</u>	ja <u>n</u>	ja <u>n</u>	何
ABAB	ku <u>a</u> n	ko <u>n</u>	ku <u>a</u> n	ko <u>n</u>	足
ABBB	da <u>u</u> ra	də <u>u</u> ra	də <u>u</u> ra	də <u>u</u> ra	下に
ABBC	qe <u>r</u> i-	qu <u>r</u> i-	qu <u>r</u> i-	qi <u>r</u> i-	出る
ABCB	pu <u>s</u> e	pu <u>s</u> e	pə <u>s</u> a	pu <u>s</u> e	また
ABCC	lo <u>t</u> ue	lu <u>o</u> tue	lo <u>t</u> o	lo <u>t</u> o	ラクダ

ABCD qoron goruan goron goron 庭

印刷の関係で本来 IPA にはない記号が使われていることがある。馬国良 (1988), 阿・伊布拉黒麦 (1988), 那森柏 (1987, 1988), 呼和巴拉 (1981) では G が g の代用形として用いられている。那徳木徳 (1988) の η も η の代用形である。また IPA にはあるが違った記号を用いているものがある。『東郷語簡誌』, 『蒙古語族語言詞典』では γ が用いられている。ɣ の代用形のつもりであろうが, 前者は軟口蓋音, 後者は口蓋垂音であるから調音点がはっきり違う。g と ɣ はほぼ相補分布するが, g と γ は相補分布しないから単に記号の選択の問題ではすまされない。『東郷語簡誌』では a が用いられている。他の資料では α が用いられているが, この場合は調音点の問題というよりも, 単に記号の選択の問題にすぎない。『東郷語簡誌』の ao は『東郷語詞彙』, 那徳木徳 (1988) の au, 『蒙古語族語言詞典』, 馬国良 (1988) ao, 阿・伊布拉黒麦 (1988) の ɔ に対応するが, これは記号の選択の問題であると共に解釈の違いでもある。阿・伊布拉黒麦 (1988) は他の表記が x としているところを χ で表記している。調音点の違いを正しく認識している表記である。というのは, 『東郷語簡誌』の tuxua「柱」は Тодаева の tuḡu, 『東郷語詞彙』の tuk(u)α に対応するので x は明らかに口蓋垂音であるからである。『東郷語詞彙』, 那徳木徳 (1988), 包力高 (1988), 那森柏 (1988) 呼和巴拉 (1981) は n/ŋ (あるいは η) を区別しているが, 『東郷語簡誌』, 『蒙古語族語言詞典』, 阿・伊布拉黒麦 (1988), 那森柏 (1988) は区別していない。ほとんどの研究者は w を音素として認めているが, 阿・伊布拉黒麦 (1988) は認めていない。彼はまた tɕ, dʒ を音素として認めない。Тодаева は他のほとんどの研究者が認めている g と ɣ (あるいは γ) を区別していない。

1. 音節構造

東郷語はモンゴル系の諸言語のうちで開音節志向の言語として知られてきた。閉音節を構成するのは通常は鼻音だけである。しかしごく稀にはあるが, 鼻音以外の子音が閉音節を構成している場合がある。『東郷語詞彙』には sda-「引く張る」, sdasuŋ「筋」, sdara-「火がつく」, sdzakaxaŋ「鼠」のような語頭の sC³⁾ 及び asmaŋ「天」, taṣbaɕ「数珠」, kəwax「子ども」のような音節末の s が記されている。阿・伊布拉黒麦 (1988: 153) にも kəwos「子ども」という語が挙がっているが, 他の資料では s の後に母音が記されている。『東郷語詞彙』にはさらに龍泉方言の gurwaŋ「三」, dzierwaŋ「四」のような音節末の r が記されている。『蒙古語族語言詞典』には語末の子音として baṣ「虎」, ibar「跡形」, əsar「預言」が記されている。「虎」は他の資料では語末に母音が添加されている。あとの二つは他の資料には見られない。阿・伊布拉黒麦 (1988: 72) の ruhər「靈魂」, gər(sic) (p. 73 では giə)「家」や Тодаева の fugie(r)「牛」, mau-er「猫」, tau-er「桃」, ba-er「銭, 貨幣」のような語末の er は他の資料では ə に対応するものであるから母音の認定の問題とも関わる。Тодаева にはさらに, kielsendudene「言い合って」(p. 74, l. 22) という語が記録されている。

が、これは誤植であろう。音節末子音が鼻音の場合は、詳しくは後述するが *n* か *ŋ* である。しかし *Тодаева* には *m* で終わる次のような語が記録されている。*tomtura*-「ぼろぼろになる」(p. 73, l. 16), *niembe-*, *niembekuni*「覆う」, *numbusun*「涙」, *umba-*「水浴びする」, *tšiembi*「鉛筆」。*m* の現れるのは *b* の前が多いが、*b* の前で必ず *m* になるわけではない。

2. アクセント

東郷語のアクセントの記述は研究者によってばらつきが非常に大きい。*Тодаева* (1961: 18) はアクセントは第一音節にあり、第二アクセントが語末音節にあると記し、次の例を挙げている。*mánta*-「掘る」, *ġadža*「池」, *fúnige*「狐」, *árasún*「皮」, *súmláku*「考える」。

他の資料ではアクセントは普通語末にあると記述している。

2.1. アクセントの最小対立

各研究者がアクセントの最小対立を記しているが資料によって微妙に違っている。挙げられている語の例が違うのはともかく、ある資料で最小対立となっている語の対が別の資料では同音異義語のことがある。「水泡」と「膀胱」⁴⁾ は、劉照雄 (1965: 165) では最小対立であるが、布和 (1988) では同音異義語である。劉照雄 (1981: 17) ではこの例を挙げていないので撤回したのかもしれない。しかし *E* の対も布和 (1988) では区別されていない。布和の表記で 008 は『東郷語詞彙』のものであり、アクセントの表記のないものは最終音節にアクセントがある。

	(1) 劉照雄 (1965: 165)	(2) 劉照雄 (1981: 17)	(3) 布 和 (1985: 81) (1988)	(4) 那森柏 (1988)	漢 語 ⁵⁾
A	<i>ba'wa</i>	<i>ba'wa</i>	<i>ba'wa</i>	—	聖職者
	<i>'bawa</i>	<i>'bawa</i>	<i>'bawa</i>	—	曾祖父
B	<i>dawa'la</i>	—	<i>'dawala</i> 008	—	水泡
	<i>'dawala</i>	—	<i>'dawala</i> 008	—	膀胱
C	—	<i>ʂən'dzuu</i>	—	—	衫子 <i>shan¹zi</i> 上着
	—	<i>'ʂəndzuu</i>	—	—	扇子 <i>shan⁴zi</i> うちわ
D	—	<i>bao'dzuu</i>	—	—	包子 <i>bao¹zi</i> 饅頭
	—	<i>'baodzuu</i>	<i>baudzi</i> 008	—	豹子 <i>bao⁴zi</i> ヒョウ
E	—	<i>biən'dzi-</i>	<i>biandzi-</i> 008	—	編 <i>bian¹</i> 編む
	—	<i>'biəndzi-</i>	<i>biandzi-</i> 008	—	変 <i>bian⁴</i> 変わる

F	—	—	gi'dzi	—	獅子	shi ¹ zi	獅子
	—	—	'sidzi	—	柿	shi ⁴ zi	柿
G	—	—	i'dzi	—	椅子	yi ³ zi	椅子
	—	—	'idzi	—	胰子	yi ² zi	洗濯石鹼
H	—	—	ba'dzi	ba'dzui	疤子	ba ¹ zi	傷
	—	—	'badzi	'badzui	把子	ba ³ zi	握る所
I	—	—	putura-	pu'tura			散る
	—	—	—	'putura			粉
J	—	—	bosi-	bo'sui			起きる
	—	—	'bosi	'bosui			布

C, D, E, F の対を漢語の声調と比較してみると、第一音節に第一声がある場合が東郷語で無標アクセント、第四声がある場合が東郷語で有標アクセントになっている。これらの四つの対に H を加えても、第一音節が第一音の場合が無標アクセント、それ以外が有標アクセントといえる。しかし G の場合がよくわからない。第三声+軽声が G では無標アクセント、H では有標アクセントになっている。

2.2. 有標アクセントの来源

『東郷語彙詞彙』には最小対立とは無関係に、アクセントが語末に来ない36語についてアクセントの位置が記してある。これら有標のアクセントの大多数は語頭音節にあるが一部（3語）は語中にある。語源的にはモンゴル系の語彙（4語）、漢語からの借用語（15語）、アラブ語からの借用語（3語）、不明のもの（14語）が記されている。モンゴル系の語彙のうち 'basi<bars 「虎、寅」、'bosi<bös 「布」は、語末に母音が添加している語である。一般に名詞は語末の子音を脱落させるのが東郷語の通時的变化に見られる傾向であるが、一部にこういった母音が添加する例がある。しかし pəsədu<(busud) 「その他」も語末に母音が添加しているのにアクセントは無標である。残りのうち1例は龍泉方言の 'nudu<ənudu 「今日」であるが、これは那森柏（1988：99-100）の記述 'intu<imutu 「このような」、'tçintu<tçimutu 「そのような」のような母音脱落によるアクセント移動と関係があるのかもしれない。もう一例は 'wain (ə) u 「ありますか」である。これは -nə の直前にアクセントが来るという那森柏（1988）の記述とは一致するが、wainə 「ある」のアクセントは無標のままである。ただし布和（1985：81）では 'wai-nə と記されている。

漢語借用語には声調が反映されている可能性があるのではないかという疑問が起こるので検討してみる余地がある。漢語借用語のうち東郷語で有標アクセントを持っている語のアクセントを有する音節が普通話でどの声調を有するかに基づいて分類すると次のようになる。第一声は 'aji<阿姨 (a¹yi²) 「父の弟の妻」、'xaçion daji-<呵欠 (he¹qian⁴+打) 「あくびをする」の2語、第二声は 'id-

zi<胰子(yi²zi)「石鹼」, 'tanbaʃi<彈把勢(ta²ba³ʃi)「演奏家」, ɕian'jidzi<香胰子(xiang¹yi²zi)「化粧石鹼」の3語, 第三声は'tusu<土俗(tu³su²)「風俗」の1語, 第四声は'balu-<罷(ba⁴olu)「結束する」, 'xaudzi<号子(hao⁴zi)「ラッパ」, 'xuaməi<画眉(hua⁴mei²)「トラツグミ(鳥)」, 'xuʃi<護士(hu⁴ʃi)「看護婦」, 'ludzi<鷺鷥(lu⁴si)「カササギ(鳥)」, 'ʃidzi<柿子(ʃi⁴zi)「柿」, 'daudzi<稻子(dao⁴zi)「稻」, 'dadəu<大豆(da⁴dou⁴)「ソラマメ, オタフクマメ」, 'datʃəŋ<大臣(da⁴chen²)「大臣」の9語ある。第四声が比較的多いように見えるが, 普通話で第四声を有する借用語が常に有標アクセントを持つわけではないので, 有標アクセントの来源ははっきりしない。

漢語の声調の組み合わせについても検討してみると, アクセントのある音節と次の音節の関係が, 第一声+第二声(2例), 第一声+第四声(1例), 第二声+第三声(1例), 第二声+轻声(1例), 第三声+第二声(1例), 第四声+第二声(2例), 第四声+第四声(1例), 第四声+轻声(5例)となり, 第四声+轻声の組み合わせが圧倒的に多いことがわかる。しかしこの声調の組み合わせで有標のアクセントを持っていない語を『東郷語詞彙』から探すのは簡単である。第四声+轻声の例を挙げると, gaidzi<蓋子(gai⁴zi)「蓋」, gaŋdzi<杠子(gaŋ⁴zi)「傍線」, lidzi<例子(li⁴zi)「例」, məifu<妹夫(lei⁴fu)。

2.3. 那森柏(1988)のアクセントに関する記述

那森柏(1988)はアクセントに関して重要な指摘をしている。名詞から形容詞を派生する接辞(-daiɕn), 格附加成分(-ni, -sə, -Gala, -lə, -rə, -, sə, -, də(, は第二アクセント)), 第一, 第二人称単数複数の物主(-mini, dʒiənʒi, -maʒi, -tʃuni, -tani), 集合数詞(-dzia) 倍数詞(-fa), 動詞の終止形(-nə, -dzuwo, -dzuwo, -wo), 意志, 命令形(-jə, -giə), 副動詞(-dzu, -də, -sə, -tala, -lə)にはアクセントが来ないで, すぐ前の音節にアクセントが来るというものである。しかし複数接辞, その他の接辞が付いた場合は語末音節にアクセントが来る⁶⁾。

このことについて述べたものはわずかに布和(1985:81)のみである。mə'dzia-nə「知る」, o'lu-nə「得る」, 'wai-nə「ある」のように -nə の例が挙げられている。しかし布和(1985:168) bo'ro mo'ri mə'liə oro'wo「灰色の馬が前を走った」の最後の語のアクセント是那森柏(1988)の記述と一致しない。馬国良(1988:7)の dziao-də-mi'ni「私の弟に」や劉照雄(1981:17)の ana'ni「母の／を」(属格／対格), barindu'dzu「持って」(副動詞)も那森柏(1988)の記述と一致しない。那森柏(1988)にはさらに, 'dosu「友」, 'dʒaru-「使う」, 'giədu「いくつ」, 'jama「何も」, 'kiəma「誰も」などの有標アクセントが記されているが, 『東郷語詞彙』では無標である。

3. 単純母音

単純母音の音素目録は次のようになっている。

東郷語の音韻体系

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Тодаева (1961)	i	e			a		o	u	ʊ		
劉照雄 (1981)『東郷語簡誌』	i	ə			a		o	u	ʊ	ɤ	
阿・伊布拉黒麦 (1988)	i	ə		ɛ	ɑ	ɔ	o	u			
伊布拉黒麦記録, 整理 (1987)	i	ə			a		o	u	ʊ	ɤ	
那徳木徳 (1988)	i	ə			ɑ		o	u			
布和 (1988)『東郷語詞彙』	i	ə			ɑ		o	u	ʊ	ɤ	
陳乃雄 (1990: 80-84)	i	ə			ɑ		o	u	ʊ	ɤ	
孫竹 (1990)『蒙古語族語言詞典』	i	ə	(e)		ɑ		o	u	ʊ	ɤ	(y)

最も大きな違いは ɤ を母音として認めるかどうかである。阿・伊布拉黒麦はこれを əɣ, Тодаева は er と解釈しているので反舌母音は現れない。ʊ は阿・伊布拉黒麦には現れないで i または ə に対応する。また阿・伊布拉黒麦 (1988) の ɛ, ɔ は他の資料では二重母音 ai, au に対応するものであるが, 伊布拉黒麦記録, 整理 (1987) では認められていない。孫竹 (1990) の語彙リストでは e は lindzewə 「逝世」にのみ現れ, y は dzy 「局」, dziedzy 「終結」, xancy 「含蓄的」の 3 語にのみ現れる。これらの母音に限らず, このリストには出現頻度の少ない音が他にも認められている。那徳木徳は五つの母音しか認めていない。

3.1. [ɿ, ʔ, ʊ] の解釈

反舌音 ʂ, tʂ, dz には [ʔ], 歯音 s, ts, dz には [ɿ] が続き [i] は続かないという一般的な特徴がある。また q, ɣ, t の後にも [i] ではなく [ʊ] が続くことがある。こういった [i] と対立しない母音を各資料がどのように音素分析しているかという、次のようになっている。

	Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語 詞彙』	伊布拉黒麦
A ʂ, tʂ, dz [ʔ] n (～ŋ)	/ʊ/	/ʊ/	/ə/	/ə/	/i/
B ʂ, tʂ, dz [ʔ]	/ʊ/	/ʊ/	/ʊ/	/i/	/i/
C s, ts, dz [ɿ]	/ʊ/	/ʊ/	/ʊ/	/i/	/i/
D q, ɣ [ʊ]	/ʊ, e/	/ʊ/	/ʊ/	/ʊ, ə/	/i/
E t [ʊ]	/ʊ/	/ʊ, ə/	/ʊ/	/ʊ, ə/	/ə/

阿・伊布拉黒麦を除いて /i/ とは違った母音 /ʊ/ を音素目録として認定している。しかし /ʊ/ の異音は資料によって異なっている。

『蒙古語族語言詞典』と『東郷語詞彙』では反舌音+[ʔ]+n (～ŋ) の母音は [i] のみならず [ə] と

も中和している。漢語にも興味深い現象があって、拼音で表記すると chi, zhi はあるが chin, zhin はなく, chen, zhen がある。『蒙古語族語言詞典』, 『東郷語詞彙』では漢語借用語にも以上の原則が適用されている。以下に固有語の実例を示す。数字は記載されている頁を表す⁷⁾。

	Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語詞彙』	伊布拉黑麦	
A	u	u	ə	ə		
	džotšun	dzotšun	dzotšən	dzotšəŋ	—	客
	latšun	latšun	latšən	latšən	—	葉
	kuaitšun	quaitšun	quaitšən	quaitšən	—	古い
B	u	u	u	i	i	
	tšwǵan	tšwǵan	tšwǵan	tšigan	tšigan	146 白い
	tšwǵəŋ	tšwǵun	tšwǵuŋ	tšigən	tšigən	145 耳
	tšwdže	tšwdžə	tšwdžə	tšidžə	tšidžə	146 花
	u	u	u, i	i	i	
	šure	surə	šurə, ɟirə	širə	širə	72 机
C	u	u	u	i	i	
	bosw-	bosw-	bosw-	bosi-	bosi-	147 起きる
D	u	u	u	u	i	
	ǵumusun	ǵumusun	ǵumusun	ǵumusuŋ	Gimusun	66 爪
	qawšugu	—	qawšuyəi	qawšixəi	—	梯子
	qurtun	quɖun	quɖ/tun	quɖuŋ	—	硬い
	quǵi	quǵəi	quǵəi	qu (x) ǵəi	—	豚
	qušun	—	qušun	qušun	—	苦い
	eǵw-	—	əɣw-	əɣw-	—	打つ
	e	u	u	u		
	qeri-	quri-	quri-	quri-	—	出る
	e	u	u	ə	i	
	tšwqəŋ	tšwǵun	tšwǵun	tšigəŋ	tšigən	145 耳
E	u	u	u	u	ə	
	tuqɑ	tuǵɑ	tuǵɑ	tu(x)ǵɑ	təǵɑ	143 鶏
	u	u, ə	u	ə	ə	
	tudžw	tuw/ədzw	tudžw	tədzw	t'ədžj	73 ボタン

以上の条件以外で *u* が現れるものとして『東郷語詞彙』には *pudzəu*「毛皮をかじる虫の名」, *pwsədzi*~*pəsədzi*「その他」, *pudza*~*pudza*「豆」のように *p* に後続する例が挙げられているが、このうち2例は *ə* や *u* との交替形を有する。馬国良 (1988: 3) には *dalw*「肩」があるが、『東郷語詞彙』では *daləu* である。Тодаева には *bandun*<坂凳 (*ban³deng³*)「ベンチ」, *bunzu*<本子 (*ben³zi*)「ノート」, *puundzi*<碰見 (*peng⁴jian*)「ばったり出会う」, *xuanfun*<狂風 (*kuang²feng¹*)「暴風」, *šianfun*<旋風 (*xuang⁴feng¹*)「竜巻」にも *u* が現れる。これらは拼音の *eng* に対応する位置に現れるものばかりであり、『東郷語詞彙』では *ən* または *əŋ* に対応する。Тодаева ではさらに *puwe*「また」, *kuwan*「息子」にも *u* が現れるが、他の資料では前者は *ə*, 後者は *u* となっている。

/w/ を音素として認めなければならない理由はないように思われる。『東郷語詞彙』では *D* と *E* の場合のみ */w/* を認めているが、*q*, *g*, *t* の後に *i* は起こらない (ただし *ɿ* は存在する) のでこれらを */i/* と解釈していっこうさしつかえない。布和 (1985: 13) は *i* と *w* では音価が違いすぎるという理由だけで */w/* を認めている。阿・伊布拉黑麦が *E* の場合に */ə/* と解釈しているのは彼が *[tɕi]* を */ti/* と解釈する以上しかたのないことである。布和 (1985: 54) は *ʂ* と *ɕ* が別の音素である理由として *ʂira*「黄色」／*ɕira*「下へ」及び *šidziə*「時間」／*ɕidziə*「縫う」という最小対立を挙げているが、もし */w/* を独立した音素として認め、*šura*「黄色」／*šira*「下へ」, *šuziə*「時間」／*šižiə*「縫う」と音素解釈すると *ʂ* と *ɕ* が別の音素であるとはいえなくなる。逆に *ʂ* と *ɕ* が別の音素であると解釈すると */w/* を音素として認める必要はなくなるわけである。『東郷語詞彙』には *ʂəŋgiən*「希薄な」~*ɕiŋkiən*「浅い」というダブルットが記されている。*g* と *k* の違い以外に *ʂə* と *ɕi* の違いがあるが、反舌音+*w*+*n* (~*ŋ*) における母音は *A* で示したように */ə/* と解釈するため、このような二重の違い (子音も母音も違う) があるように見えるにすぎない。しかし反舌子音の後で *i* と *ə* が対立するかどうかはよくわからない。『東郷語詞彙』の *atɕi*「積む」, *otɕi*「行く」, *udzə*「見る」, *bajadzə*「豊かになる」などの語末の母音が本当に対立しているのかどうかははっきりしない。『東郷語詞彙』では反舌音+*w*+*n* (~*ŋ*) における母音は *A* で示したように */ə/* と解釈されているが、*otɕi*「行く」+*n* (副動詞) は布和 (1985: 169) では *otɕən* ではなく *otɕi-n* と記されている。

3.2. 『蒙古語族語言詞典』に現れる *e*, *y*

『蒙古語族語言詞典』には *e* が *lindzewə* (*nasu baraqu* の項目)「逝世」にのみ現れる。*dʒ* と共に稀にしか現れない表記である。*y* が *dzy* (*tobčiya* の項目)「局 (*ju²*)」, *dziədzy* (*tegüsgel* の項目)「終結 (*zhong¹jie²*)」, *xançy* (*yoɣtu* の項目)「含蓄的 (*han²xu⁴de*)」の3語にのみ現れる。*liçin* (*ayan* の項目)「旅行 (*lǜ³xing²*)」, *dzinji* (*altan jiyasu* の項目)「金魚 (*jin¹yu²*)」, *dziədzin* (*sigidbüri* の項目)「決定 (*jue²ding⁴*)」などと比べて *y* は *i* のバリエントであると思われる。『東郷語詞彙』でも拼音の *ü* は *lu*「緑 (*lǜ⁴*)」を除いて全て *i* に対応している。

4. 重母音

二重母音、三重母音を布和 (1988)『東郷語詞彙』に基づいて分類すると次のようになる。

	A	B	C	D	E	F
1	ai	əi	ou	ui		
2	ia	iə		iu	iau	
3	ua		(uo)			uai
4	au					

uo は tʃuodzi「印, 図章<戳子 (chuo¹zi)」にのみ現れる。拼音の uo はこれ以外は東郷語では o に対応するので, uo は o のバリエントといえる。

Тодаева (1961) にはこれ以外に 3 B に該当する ue という二重母音がある。劉照雄 (1981)『東郷語彙簡誌』は11母音であり表記法の微妙な違い (a か ɑ か, ao か au かなど) を別にすれば, 布和 (1988)『東郷語詞彙』と原則として同じである。ただし本文の ou は語彙リストでは əu となっている。

阿・伊布拉黑麦 (1988) では 1 A に相当するのが e, 4 A に相当するのが ɔ⁸⁾ という単純母音であり, それに並行して 2 E が io, 3 F が ue となっている以外は布和と同じである。uo は存在しない。

孫竹 (1990)『蒙古語族語言詞典』における陳乃雄の序文 (pp. 80-84) では, 1 C がなく代わりに 4 B として əu がある点を除いて, 布和 (1988)『東郷語詞彙』と同じである。もちろん ou=əu である。しかし同書の本文の語彙リストには次のような重母音が出現する。

	A	B	C	D	E	F
1	ai	əi	(ou)	uəi		
2	ia	iə		iou	iao	
3	ua	uə			(iau)	uai
4	(au)	əu				
	ao					
	(aə)					
	(ei)					

括弧に入れてあるのは出現頻度が少ないものである。ou=əu, au=ao, iau=iao, uə=o (いずれも前者が有標) という関係がある。aə, ei はそれぞれ1例ずつしか現れない。したがって, やはり

布和 (1988)『東郷語詞彙』と同じである。

孫竹 (1985 : 652-693)「蒙古語, 達斡爾語, 東郷語詞彙五百例」には『東郷語詞彙』で *au* に対応する母音 *ou* がある。*mou*「悪い」, *lousa*「ラバ」, *toulai*「兎」, *ɕoudzie*「影」。

那徳木徳 (1985) は下降二重母音を *aj*, *əj*, *uj* と解釈し, 上昇二重母音の第一要素は口蓋化した子音と解釈するので, *ou*, *ua*, *au* という三つの二重母音しかないことになる。

4. 1. *iən/ian*

iən と *ian* は実質的には対立しているとはいいい難い。それは次のような事情があるからである。『東郷語簡誌』では *ian* はごく稀にしか現れない。『東郷語詞彙』では固有語には *iən* しか現れない。Тодаева では *en*, *un* も現れるがやはり基本的には *ien* である。『蒙古語族語言詞典』では確かに *iən* と *ian* が区別されているように見えるが, この資料の特徴として多くの異音を書き分けていることを考慮すると両者は同一のものであると見なしてさしつかえないようである。『蒙古語文集』は『蒙古語族語言詞典』と同じ著者のものなので, 敢えて例を挙げたが, これについては判断は保留せざるを得ない。以下に例を示す。

	Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『蒙古語文集』	『東郷語詞彙』	
A	<i>ien</i>	<i>ian</i>	<i>ian</i>		<i>iən</i>	
	<i>belien</i>	<i>bəlian</i>	<i>bəlian</i>	<i>bəlian</i>	<i>bəliən</i>	準備できた
B	<i>(i)en</i>	<i>iən</i>	<i>ian</i>		<i>iən</i>	
	<i>šien</i>	<i>ɕiən</i>	<i>ɕian</i>	≠ <i>ɕiən</i> , <i>ɕan</i>	<i>ɕiən</i>	尻尾
	<i>ninken</i>	<i>ninkien</i>	<i>ninkian</i>	<i>ninkian</i>	<i>ninkien</i>	薄い
	—	<i>gongien</i>	<i>gongian</i>	≠ <i>gonganni</i>	<i>gongien</i>	軽い
	<i>tulien</i>	—	<i>tulian</i>	<i>tulian</i>	<i>tulien</i>	柴
	<i>udziešwlien</i>	—	<i>udziəʂwlian</i>	—	<i>udziəʂiliən</i>	夕方
	<i>olien</i>	<i>oliən</i>	<i>olian</i>	≠ <i>olon</i>	<i>oliən</i>	雲
					<i>wəiliən</i>	
	<i>widzien</i>	<i>uidziən</i>	<i>uidzian</i>	≠ <i>uidzan</i>	<i>uidziən</i>	門
					<i>wəidziən</i>	
C	<i>ien/un</i>	<i>iən</i>	<i>iən</i>		<i>iən</i>	
	<i>nukun</i>	<i>nokiən</i>	<i>nokiən</i>	<i>nokiən</i>	<i>nokiən</i>	穴
	<i>naitšien</i>	<i>nəitɕiən</i>	<i>nəitɕiən</i>	—	<i>nəitɕiən</i>	湿った
	<i>džuelien</i>	—	<i>dzoliən</i>	≠ <i>dzolon</i>	<i>dzoliən</i>	柔らかい
	<i>kielien</i>	—	<i>kiliən</i>	<i>kiliən</i>	<i>kiliən</i>	舌

kien kiən kiən kiən kiən 誰

漢語借用語では事情は少し違っている⁹⁾。『東郷語簡誌』では iən しか現れない。『蒙古語族語言
 詞典』では iən は 6 例のみで残りは ian である。『東郷語詞彙』では tɕ, ɕ, dz の後では iən, それ以
 外では ian が現れる。Тодаева では ien も ian も現れ、完全ではないがほぼ相補分布している。l, š,
 s の後には ian が現れ、b, m, tš, j, n の後には ien が現れ、dʒ の後には両方現れる。

4.2. oŋ/uan

閉音節の oŋ (～on) /uan (～uan) に関して各資料で次のような対応がある。『東郷語簡誌』では
 二重母音をいっさい認めていない。しかし劉照雄 (1981 : 7) では /o/ の異音として二重母音を認
 めている。他の資料では二重母音の認めかたが語によって様々である。『東郷語詞彙』では oŋ と
 uan をバリエーションとして認めている語と一方だけを認めている語とがある。

Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語詞彙』	
haruan	haron	haron	haroŋ, haruan	十
kuan	kon	kon	kuan	足
uanšur-	onšur-	uanšur-	oŋši-, wanši-	読む
xon	xon	xon	xoŋ, xuan	年
džuŋguan	dzuyon	—	dziŋxoŋ	六
dolon	dolon	dolon	doloŋ	七
tšueguan	tšoyon	tšoyuan	tšoxoŋ	少ない

漢語からの借用語にはこういう問題は生じない。拼音の ong, uan は『東郷語詞彙』では uŋ, uan
 になっている。

4.3. 口蓋垂音の直後の əi/i

口蓋垂音 ɣ (あるいは資料によっては ʏ) の直後の əi/i のうちの一方だけが現れる資料と両方が現
 れる資料とがある。『東郷語簡誌』は əi のみ Тодаева は i のみが現れるのに対し、『蒙古語文集』,
 『東郷語詞彙』では両方が現れる。この使い分けの基準はよくわからない。

Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『蒙古語文集』	『東郷語詞彙』	
A ġi	ɣəi	ɣəi	ɣəi	ɣi	
fumuġi	fumuɣəi	fumuɣəi	—	fumuɣi	臭い

	toḡi	toɣəi	toɣəi	toɣəi	toɽi	肘
	—	muʃuɣəi-	muʃuɣəi-	—	muʃiɽi-	絞る
	saḡi-	—	saɣəi-	—	saɽi-	守る
	endeḡi	əndəɣəi	əndəɣəi	əndəɣəi	əndəɽi	卵
B	ḡi	ɣ/Gəi	ɣ/Gəi	ɣ/Gəi	ɽ/Gəi	
	noḡi	noɣəi	noɣəi	noɣəi	noɽəi	犬
	quḡi	quɽGəi	quɽGəi	quɽGəi	quɽ(x)Gəi	豚
C	ḡi	ɣəi	ɣi	ɣi	ɽi, Gəi	
	ḡuḡi	Guɣəi	Guɣi, Guɽəɣəi	Guɣi	Guɽi, GuɽGəi	虫
D	ḡi	ɣəi	ɣəi		ɽi, Gəi	
	ḡuḡi	Guɣəi	Guɣəi	—	GuɽGəi, Guɽi	盗賊
E	ḡi	ɣəi	ɣəi	ɣi	ɽi	
	sadʒuḡi	—		sadzɣuɣəi	sadzɽi	カササギ

4.4. 『蒙古語族語言詞典』の ei, əə, ou, au, iau, iən

ei は lindzeizo (nerekü の項目)「蒸留する」にのみ現れる。また əə も quinaəə (qoyiɣur の項目)「後ろ」にのみ現れる。ou は souxu (uquna の項目)「去勢していない雄山羊」, mou (maɣu の項目)「悪い」, boufu (baɣɽaɣa の項目)「包袱 (bao'fu)「包み」, mougugu (möḡü の項目)「蘑菇 (mo'gu)「きのこ」, xanxou (qamquul の項目)「コゴメナデシコ」, dzouwəi (orčim の項目)「周囲 (zhou'wei')」, tciɣou (čaɣ aɣur の項目)「気候 (qi'hou')」, liumu ʃouku (burɣasu の項目)「柳木 (liu'mu')」, qa ɣouji- (dalaqu の項目)「招 (zhao')」, gouʃur (jar の項目)「広告, 布告, 告示」にのみ現れ, 他は全て əu である。au, iau も dzɣaudzur (dabquča の項目)「二重の衣」, lauxu (bars の項目)「老虎 (lao'hu')」, dziaonau (bardam の項目)「高慢な」, dziauli- (doɣduljaqu の項目)「震えつつける」にのみ現れ, 他は全て ao, iao である。iən も漢語からの借用語では 6 語にのみ現れ, 他は全て ian である。

ei, əə についてはよくわからないが, ou, au, iau, iən は əu, ao, iao, ian のバリエーションと考えられる。バリエーションであることの傍証は次のような語に見られる。luətuə (temege の項目)「駱駝 (luo'tuo)「ラクダ」, muloto (ingge の項目)「母駱駝 (mu'luo'tuo)「母ラクダ」; tciənsai (abiyas の項目)「天才 (tian'cai')」, tciənsai (bilig の項目)「天才 (tian'cai')」; giən (ebedcin の項目)「疾病」, asun gian (jibing の項目)「畜病」; dziauli- (doɣduljaqu の項目)「震えつつける」, dziaoli- (qarayiqu の項目)「跳ぶ」; uidzian (qayalɣa 及び egüde の項目)「門」, uidziən tori- (ayilčilaqu の項目)「訪問する」。

o と uə の分布は次のようになっている。o は b, p, m, f, t, l, g, x, dz, ts, s の後に現れ, uə は t, n, l, g, x, dz, ʃ, dz, # の後に現れる¹⁰⁾。

ou と əu の分布は次のようになっている。ou は x, dz, s の後に現れ, əu は d, t, g, k, x, dz, tʃ, ʃ, z, dz, s の後に現れる。

さらに untci (asaɣudal の項目) <問題 (wen⁴ti²)「問題」, ɕiənwən (erdem の項目) <学問 (xue²wen)「学問」; uidao (amta の項目) <味道 (wei⁴dao)「味」, dzuwəi (amta simte の項目) <滋味 (zi¹wei⁴)「味」; godzia (gürün の項目) <国家 (guo²jia¹)「国家」, guəzia (ulus の項目) <国家 (guo²jia¹)「国家」。

5. 長母音

長母音を記した資料は次の二点だけである。Тодаева (1961) には zāur「ナツメ」, yāle「どうする」, qā-「閉める」, qāga-「閉めさせる」, xō「蒸気」という長母音を含んだ語が記されている。那徳木徳 (1988: 63) にも qa:「閉める」, qa:xa-「門」(sic), ja:la「どうする」という長母音を含んだ語が記されている。このうち「門」というのは誤訳で、正しくは「閉めさせる」である。モンゴル文語の qayalɣa に対応する東郷語の形式は現在利用できるどの資料にも記されていない。『蒙古語族語言詞典』では qayalɣa の項目にも egüde の項目にも同じ形式 uidzian が記されている。上述の語彙の長母音は他の資料では全て短母音である。

6. 母音調和

東郷語はモンゴル文語に存在していた前舌円唇母音が消失しているため、舌の調和はほとんど崩壊している。『東郷語詞彙』の音素分析に基づいて、第一音節の母音と第二音節の母音の関係を見ていることは次のことぐらいである。

1. a, u が第一音節にあれば本来の男性語である。
2. ə が第一音節にあれば本来の女性語である。
3. l を除いて ə, i が第二音節にあれば本来の女性語である。
4. 第一音節と第二音節の関係が u—a, u—o, i—a, i—o の場合は本来の男性語であり, u—i, i—i, i—u の場合は本来の女性語である。その他の組み合わせの場合はどちらかわからない。

円唇母音が関わっている場合、どちらかわからないわけであるが、円唇牽引 (labial attraction) の名残りが無秩序なわけではない。以下、円唇牽引の実態について検討してみる。

	Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語 詞彙』	阿・伊布拉 黑麦
A	olon	olon	olon	oloŋ	多い
	oron	oron	oron	oroŋ	場所

B	(gogo-)	gogo	—	gogo	乳房	
C	bore	boro	boro	boro	腎臓	
D	komuru-	komuru-	komoru-	komoru-	ひっくり返す	
	tšueḡuen	tšoyon	tšoyuan	tšoxoŋ	少ない	
E	noke	—	nokiə	nokiə	友人	
	oliesu-	—	oliasu-	oliasu-	飢える	
F	noḡora-	noyoro	—	noḡoro-	noḡoro- 147	緑になる
	ḡoloda-	—	golodo-	golodo-	—	遠くなる
	olodu-	—	—	olodo-	olodo- 146	多くなる

A は本来の男性語, B～E は本来の女性語である。本来の男性語は規則的に円唇牽引を起こしている。Тодаева では本来の女性語で円唇牽引を起こしているのは B の「乳を吸う」のみであるが, 他の資料ではそれ以外の女性語でも円唇牽引を起こしている。本来の女性語で円唇牽引を起こさなければ通常 E のようになる。F は本来の男性語に派生接辞が付いたものであるが, Тодаева では円唇牽引が全く起こっていないのに対し, それ以外では起こっているという大きな違いがある。

東郷語の派生接辞は交替形を持つものと持たないものがある。布和 (1983: 24) によると, 持つものは三種類の交替形を持つもの (-Ca/-C(i)ə/-Co) と, 二種類の交替形を持つもの (-Ca/-C(i)ə) とに大別できる。三種類のものは動詞派生接辞であるという共通点がある¹¹⁾。このうち円唇牽引に関係があるのは三種類の交替形を持つもの, 及び二種類の交替形を持つもののうちの -gana/-gono である。Тодаева の資料では動詞派生接辞も二種類の交替形しか持っていないので円唇牽引が起こっていないのである。

7. 子音

7.1. 有声口蓋垂閉鎖音 (g) / 有声口蓋垂摩擦音 (ɸ ~ ɣ)

Тодаева には有声口蓋垂閉鎖音しか現れないが他の全ての資料で有声口蓋垂閉鎖音と有声口蓋垂摩擦音を別の音素としている。有声口蓋垂閉鎖音は語頭及び n (~ŋ) の直後以外にはある環境でのみ語中に起こる。その環境は資料によってばらつきがあるが, 『東郷語詞彙』では無声子音 + 非円唇狭母音に後続した位置である。その他の資料では無声子音 + 狭母音に後続した位置である。これらの場合の狭母音は無声化している (劉照雄 (1981: 8-9), 布和 (1985: 17)) という共通の特徴がある。これ以外の位置で母音間の有声口蓋垂閉鎖音が現れているのは『蒙古語族語言詞典』と阿・伊布拉黑麦の「びっこ」, 馬国良の「肉」であるが, 条件ははっきりしない。

一方, 有声口蓋垂摩擦音はその他の語中で起こる。n の直後でも r に由来する n の場合は「兄嫁」のように摩擦音が起こる。馬国良 (1988: 7) は「兄嫁」が *bənGən ではないと明記している。『東

郷語詞典』には、さらに *guŋɕi* (<*kirɕi*)「猛犸」、*bəŋkə* (<*bürge*)「跳蚤」という例がある。しかし *n* が *l* に由来する場合は微妙である。「手のひら」が資料によって異なった表記をしている。『東郷語詞典』には *haŋga*~*haka* (<*parɣal*)「糞」、*soŋgo*~*soko* (<*saɣulɣa*)「桶」というバリエーションが記載されていて、音節末子音が保存されている場合は閉鎖音、保存されていない場合は摩擦音になっている。バリエーションは記されていないが、音節末の *r*, *l* が脱落している場合は、*dʒiɣoŋ* (<*jirɣuɣan*)「六」、*muɕu-* (<*mörgü-*)「頭を突く」、*gaɣasun* (<*kilɣasun*)「山羊の毛」のように摩擦音になっている。*-kaŋ* のような生産的な接辞は鼻音の直後でも摩擦音を有する。もっとも *-kaŋ* の前では普通鼻音は脱落する。『東郷語簡誌』に *toGoro*「雁」という語中の *ɣ* の例があるが、『蒙古語族語言詞典』では *tongori*、『東郷語詞彙』では *toŋGori* であり、直前に *n* (〜*ŋ*) がある。

ɣ が語頭に現れる例がある。阿・伊布拉黑麦 (1988: 74) の *ɣusui*「入浴する」と『東郷語詞彙』の *ɣi*「夜が明ける」(p. 13) である。他の資料で対応する語が得られないので詳細はわからない。後者の例は *o ɣi-* という熟語に現れるものであるから語中といえなくもない。*Guri ɣa*「三杯」(*ɣa* は単独では *ika*「椀」) も同様の例である。以下に例を示す。数字は記載されている頁を表す。

『東郷語簡誌』	『蒙古語族語言詞典』	『蒙古語文集』	『東郷語詞彙』	馬国良	伊布拉黑麦
母音間					
<u>G</u>	<u>G</u>	<u>G</u>	<u>G</u>	<u>G</u>	<u>G</u>
qu <u>G</u> əi	qu <u>G</u> əi	qu <u>G</u> əi	qu(x) <u>G</u> əi	qu <u>G</u> əi 3	— 豚
tu <u>G</u> a	tu <u>G</u> a	—	tu(x) <u>G</u> a	—	t'ə <u>G</u> ə 73 鶏
tʃu <u>G</u> un	tʃu <u>G</u> un	tʃu <u>G</u> un	tʃi <u>G</u> ən	tʃu <u>G</u> un 4	tʃi <u>G</u> in 145 耳
tʃu <u>G</u> an	tʃu <u>G</u> an	tʃu <u>G</u> an	tʃi <u>G</u> aŋ	—	tʃi <u>G</u> an 146 白い
<u>G</u>	<u>G</u>	<u>G</u>	<u>ɣ</u>	<u>G</u>	<u>G</u>
tu <u>G</u> on	—	—	tu <u>ɣ</u> oŋ	tu <u>G</u> on 4	tu <u>G</u> on 142 鍋 ¹²⁾
su <u>G</u> o	su <u>G</u> o	su <u>G</u> o	su <u>ɣ</u> o	su <u>G</u> o 6	— 盲 ¹²⁾
—	—	—	tu <u>ɣ</u> /x <u>ə</u> ŋ	—	tu <u>G</u> an 147 痩せた
<u>ɣ</u>	<u>G</u>	<u>ɣ</u>	<u>ɣ</u>	<u>G</u>	<u>G</u>
do <u>ɣ</u> olon	do <u>G</u> olon	≠do <u>ɣ</u> olon	do <u>ɣ</u> olon	—	do <u>G</u> olon 140 びっこ
—	no <u>G</u> osun	—	no <u>ɣ</u> osun	—	— 羊毛
<u>ɣ</u>	<u>ɣ</u>	<u>ɣ</u>	<u>ɣ</u>	<u>G</u> , <u>ɣ</u>	<u>G</u>
mi <u>ɣ</u> a	mi <u>ɣ</u> a	mi <u>ɣ</u> a	mi <u>ɣ</u> a	mi <u>G</u> a 7	— 肉
				mi <u>ɣ</u> a 7	— 肉
no <u>ɣ</u> əi	no <u>ɣ</u> əi	no <u>ɣ</u> əi	no <u>ɣ</u> əi	no <u>ɣ</u> əi 5	— 犬
qu <u>ɣ</u> oɣo	qu <u>ɣ</u> oɣo	—	qu <u>ɣ</u> oɣo	qu <u>ɣ</u> oɣo 6	— ナイフ

—	əndzəyə	—	əndzəkə	əndzəyə	7	—	卵
n	—	—	—	—	—	—	—
<u>G</u>	<u>G</u>	<u>g</u>	<u>G</u>	<u>g</u>	<u>G</u>	—	—
—	sun <u>G</u> una	—	sun <u>G</u> una	—	sun <u>G</u> una	75	葱
—	sun <u>G</u> u-	sun <u>g</u> uku	sun <u>G</u> u-	sun <u>g</u> u-	—	—	選ぶ
—	—	—	<u>G</u>	—	<u>ɣ</u>	—	—
—	—	—	han <u>G</u> a	—	han <u>ɣ</u> a	74	手のひら
<u>ɣ</u>	—	—	<u>ɣ</u>	<u>ɣ</u>	—	—	—
bənyən	—	—	ban <u>ɣ</u> an	bənyən	4	—	兄嫁
—	—	—	—	*bən <u>G</u> ən	7	—	—
接辞							
—	<u>ɣ</u>	—	<u>ɣ</u>	—	—	—	—
—	—	—	udan <u>ɣ</u> aŋ	—	—	—	遅めの
—	quriya-	—	qur <u>ɣ</u> a-	—	—	—	出す

『東郷語簡誌』と『蒙古語族語言詞典』は ɣ でなく ɣ で表記しているが、代用形のつもりなら構わないが、調音点は軟口蓋ではなく口蓋垂であることを認識しておく必要がある。というのは /g/ と /ɣ/ はほぼ相補分布するのに対し、/g/ と /ɣ/ は相補分布しないからである。無声子音+狭母音に後続する位置で f(u)gu-「死ぬ」、fugun「脂肪」、tɕigidziə-「(髪が) もつれる」、pugu-「覆う」、sugia「斧」、sugia-「罵る」、tugia-「広める」などいくらでも閉鎖音 /g/ が起こりうる。すなわち、/g/ と /ɣ/ が対立する。本来の男性語で /g/ で表記される語は東郷語にはないが、本来の女性語で /g/ や /ɣ/ で表記される語は存在する。したがって /g/ に対応する有声摩擦音は存在しない。

7.2. n/ŋ

布和 (1985 : 42) は duran「いっぱい」/duran「好み」、jan「タバコ」/jan「何」、dzandzi-
 <蘸 (zhan⁴)「浸す」/dzandzi-
 <仗 (zhang⁴)「持ちあげる」の最小対立を挙げ n と ŋ が別の音素であることを主張している。これらの最小対立を他の表記で調べると、例えば、劉照雄 (1981) の表記では jən「タバコ」/ian (=jan)¹³⁾「何」となるから n と ŋ の最小対立ではなく、ə と a の最小対立ということになる。「浸す」と「持ちあげる」は漢語の韻尾鼻音の違いを反映しているが、漢語の借用語が常にもこのように対立を保存しているわけではない。

布和 (1985 : 57) は固有語の語末では o, u の後には ŋ だけが現れ、ia の後には n だけが現れるが、a と ə の後には n も ŋ も現れると述べている。この記述はほぼ正しいが『東郷語詞彙』には gun「深い」という例外がある。布和の主張はもう少し違った観点から見直して見る価値がある。『東郷語詞彙』の固有語を全て対応するモンゴル文語で男性語と女性語に分けて、東郷語のどの母音の

後にどちらの子音が現れているかを分類して語数を数えると次の表のようになる。ただし東郷語には交替形を持たない -suŋ (<-sun/-sün), -nuxuŋ (<-nu-ki>-nü-ki), -tsəŋ (<-ʧin/-gčín), -ɣaŋ (<-qan/-ken), -daŋ (<-dal/-del), -san (<-ʁsan/-gsen) のような接尾辞があって、男性語、女性語の別なく同じ形態素が付く。こういった語は除いて数えてある。

	oŋ	uŋ	əŋ	aŋ	iŋ		
男性語	11	52	6	35	1	—	—
女性語	2	30	4	3	2	—	—
		un	ən	an	in	iən	uan
男性語	—	—	—	1	3	—	3
女性語	—	1	4	7	1	23	1

ua の後には n しか現れないことも明確に主張できる。布和の主張で曖昧な部分は a と ə の後であるが、例外はあるにしても、本来の男性語には ŋ が現れ、本来の女語には n が現れるという傾向がはっきり確認できる。例外は gudzəŋ「首」、dzirəŋ「馬の腹帯の革紐」、oniətəŋ「孤児」、tʃigəŋ「耳」、dzierwaŋ (龍泉方言)「四」、funiəkaŋ「狐」、otɕiɣaŋ「濃い」、nojan「官吏」の 8 語にすぎない。i の場合は例があまりにも少ないので傾向がはっきりしない。doŋ~duan「声」、harəŋ~haruan「十」、xoŋ~xuan「年」のような自由交替が記されている。しかし kuan「足」に対して koŋ という形式は記されていない。

東郷語の語末の鼻音はモンゴル文語の m, n, ng, l に対応する。n と ŋ のどちらになるかは上に述べた原則に一致している。例外は 1 語 (dzirəŋ「馬の腹帯の革紐」<jirim) のみである。

n と ŋ を別の音素として認めていない劉照雄 (1981: 10) では「n は後舌母音の後で ŋ になる」と述べている。前舌母音は i, ə, 後舌母音は a, o, u, ʊ と考えられるから、劉照雄の記述は『東郷語詞彙』の表記とは対応しない。

『蒙古語族語言詞典』ではどうなっているのであろうか。この書物は陳乃雄の書いた序文 (pp. 80-84) と本文の語彙リスト (おそらく孫竹自身のデータを表記したもの) の表記とが一致しない欠陥がある。陳乃雄の記述は布和のものと基本的には一致し、n と ŋ を別の音素として認めているが、例は挙げていない。本文の語彙リストのほうにも n と ŋ の両方が現れるが、ŋ が用いられているのは, mənkaŋ (bosuɣa の項目) <門檻 (men²kan³)「敷居」、xuŋxuətudzo (nargiqu の項目) <歡笑 (huan¹xiao³)「楽しそうに笑う」、tʃuŋmin (mergen の項目) <聡明 (cong¹ming)「賢者」、ɕiaŋ (körüg の項目) <像 (xiang⁴)「肖像」の 4 語 6 例のみであり、他の語は全て n が用いられている。

Тодаева でも次の少数の語のみ ŋ で他は全て n が用いられている。amaŋ「口」、boroŋ, boroŋni「灰色」、dzien「服」、qoroŋ「庭」、quruŋ「小麦粉」、nasuŋ「蔵」、nuduŋ「目」、otšien「娘」、furuŋ

「唇」, tʃuŋeŋ「耳」, tʃuŋeŋda-「聞く」, ʃieŋ「尾」, ʃuɖuŋ「齒」。なぜこれだけが ŋ を有するのかよくわからないが, ŋ が現れるのは形態素末に限られているという特徴がある。さらに重要な漢語借用語には ŋ は現れないということである。したがって Тодаева の ŋ と『東郷語詞彙』の ŋ は対応しない。

7.2.1. 『東郷語詞彙』の固有語における語中音節末の n/ŋ

前述の布和の主張は固有語の語末についてであった。語中ではどうなっているのだろうか。『東郷語詞彙』には語中の音節末に n を持っている固有語は、本来の男性語25語、本来の女性語20語、計45語が記載されている。また語中の音節末に ŋ を持っている固有語は、本来の男性語24語、本来の女性語8語、計32語が記載されている。ŋ を持っている語が本来の男性語に優勢であることが認められる。本来の女性語の8語は全て ŋ の後に k か g が続く。しかし n を持っている語の場合男性語、女性語の差はない。東郷語の形式に注目しても、先行母音が ia の場合は n が後続している (miəngu「銀」, niənbə-「被る」など) が、それ以外の場合はどちらともいえない。語中の場合は、後続する子音が逆行同化を起こす可能性も検討しなければならないが、n に後続する子音は b, t, d, dz, tʃ, dz, ʃ, l, g, ɸ であり, ŋ に後続する子音は t, dz, tʃ, dz, ʃ, s, l, k, g, q, ɸ, ɕ であるから、明確な区別はできない。さらに, gundzu「袖」と guŋdzula-「袖に入れる」では違った子音が記されている。oŋʃi-~wanʃi-「読む」のような自由交替が記されているが, oŋ~uan の関係は語末におけるほど明確ではない。派生語の場合は、布和 (1988: 82) に qaluŋ+da-「熱くなる」は qalunda- になるという一応の説明はある。

7.2.2. 『東郷語詞彙』の漢語借用語における音節末鼻音

『東郷語詞彙』には漢語からの借用語が豊富に記されている。時間 (ʃi²ʃian)>ʃidziə のように韻尾鼻音が脱落しているものが9例あるが、ほとんどはよく保存されている。拼音の n と ng の区別がどの程度保存されているのか後続子音によって分類してみると次のようになる。次の表で左の縦の欄は拼音を示している。横の欄は後続する東郷語の子音を示している。表の中の子音はその位置でどの子音が実際に現れているかを示している。

	w	l	r	j	m	n	ŋ	b	d	g	ɕ	p	t	k	q	dz	dʒ	dz	ts	tɕ	tʃ	ʒ	ɸ	f	s	ɕ	ʃ	x	h	#	
n	n	n			n	n	n		n	n	n		n	n	n		n	n	n		n	n		n	n	n		n		n	
	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ		ŋ	ŋ					ŋ	ŋ	ŋ									ŋ	ŋ	ŋ	ŋ		ŋ		ŋ	
ng	n							n	n				n		n	n		n	n						n				n		n
	ŋ	ŋ		ŋ	ŋ		ŋ	ŋ	ŋ			ŋ			ŋ	ŋ				ŋ	ŋ		ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ		ŋ		ŋ

表から n と ng はきわめて中途半端にしか保存されていないことが読み取れる。また、どの子音になるかは後続子音によっては弁別できない。しかし完全に無秩序なのでもない。拼音の n が η になっている語数と、拼音の ng が n になっている語数を後続する子音別に数えてみたのが次の表である。

	唇音					齒音							反舌音			
	w	m	b	p	f	l	n	d	t	dz	ts	s	dz	tʃ	ʒ	ʃ
$n > \eta$		1	1		1	2	2		1	4				1		5
$ng > n$			2			1		2	3	1				1		

	齒基硬口蓋音			硬口蓋音		軟口蓋音			口蓋垂音				聲門音	語末
	dʒ	tɕ	ɕ	r	j	ŋ	ɡ	k	ɢ	q	ɣ	x	h	#
n>ŋ	2		1		7		3	3				6		43+5
ng>n	6	2	3											1

後続子音が硬口蓋音、軟口蓋音、口蓋垂音及び語末では圧倒的に η が優勢であることがうかがわれる。それでは先行母音はどうかというと、拼音の ang , $iang$, $uang$ に対応する子音が常に η で現れること、及び拼音の $üan$ の子音が常に n で現れるのを除いて、拼音の韻尾鼻音は東郷語の借用語では n にも η にも対応する。

漢語借用語の音節末鼻音が東郷語でどのようなになっているかはきわめて繁雑である。字音の例をいくつか示してみよう。規則性を見つけることは不可能に近い。

漢語借用語の n が東郷語で $n \sim \eta$ の例として、「板」が板凳 (ban^3deng^2) では $bandə\eta$ 「ベンチ」と n が保存されているが、「板」(ban^3) $> ba\eta$, 案板 (an^4ban^3) $> na\eta ba\eta$ 「まな板」では n が保存されていない。また、「分」が分散的 (fen^1san^4de) $> fənsandzi$, 坏分子 ($huai^4fen^4zi^3$) $> xuai fəndzi$, に対し分 (fen^1) $> fə\eta$, 養分 ($yang^3fen^1$) $> ja\eta fə\eta$, 秋分 (qiu^1fen^1) $> tɕiufə\eta$, 福分 (fu^2fen^4) $> fufə\eta$ 。こういう例は枚挙にいとまがない。逆に漢語借用語の ng が $> n \sim \eta$ の例としては、「紅」が紅火 ($hong^2huo^3$) $> xu\eta xo$ 「活気を呈する」, 紅沙 ($hong^2sha^1$) $> xu\eta ʃa mori$, 紅茶 ($hong^2cha^2$) $> xu\eta tʃa$ 「紅茶」, 紅嘴鴉 ($hong^2zui^3ya^1$) $> xu\eta dzuijaə$ 「カラス」, 口紅 (kou^3hong^2) $> kəuxu\eta$, 粉紅 (fen^3hong^2) $> fənxu\eta$ 「ピンク色」では η が保存されているのに対し、紅銅 ($hong^2tong^2$) $> xuntə\eta$ 「赤銅」では保存されていない。また「熊」が狗熊 (gou^3xiong^2) $> gəuɕi\eta$ 「熊」, 哈熊 (ha^1xiong^2) $> xaɕi\eta$ 「熊」に対し熊胆 ($xiong^2dan^3$) $> ɕindan$ では保存されていない。こういう例も枚挙にいとまがない。

布和 (1985 : 42) が挙げている最小対立 $dzəndzi$ -「浸す」/ $dza\eta dzɪ$ -「持ちあげる」は、驚 ($jing^3$) $> dzindzi$ -「驚く」, 経 ($jing^1$) $> dzindzi$ -「経過する」, 叮 ($dɪŋ^1$) $> dzindzi$ -「(蚊が) 刺す」のような

例を見るとたまたま残った最小対立のように見える。

漢語からの借用語で音節末の子音が以上のような現象を示すのは、東郷族の周辺の漢語（西北方言）に鼻音韻尾-n, -ŋ の混読現象がある（魯伯慧（昭和58：122））ことと関係があろう。臨夏方言のようすはよくわからないが、蘭州方言は（魯伯慧（昭和58：134-135））によれば、-n, -ŋ は先行する母音を鼻音化し前舌母音の後でのみ n を保存している。この現象は劉照雄（1981：10）の東郷語に関する記述「n は後舌母音の後で ŋ になる」と合い通じる。

7.3. 子音の有声音／無声音

子音の有声（無声化した有聲無気音）と無声（有気音）が資料間で対応していない次のような場合 (A, B, C, D, E) がある。

Тодаева	『東郷語簡誌』	『蒙古語族 語言詞典』	『東郷語詞彙』		
A 無声	有聲	有聲（無声）	有聲（無声）		
tʃuqɛŋ	tʃuɣuɳ	tʃuɣuɳ	tʃiɣɛɳ	耳	(1a, b)
kitʃu-	kidʒiə-	kidʒu-	kidʒi-	切る	(1a, b)
qutuɣo	qudoɣo	qudoɣo	qudoɣo	ナイフ	(1a, b)
qutun	qudun	qud/tun	quduŋ	硬い	(1a, b)
tuɣa	tuɣa	tuɣa	tu(x)ga	鶏	(1a, b)
pitʃe-	pidʒu-	pidʒu-	pidʒi-	書く	(4a, b)
sotoro	tudoro	s/tudoro	sudoro, toro	中に	(4a, b)
qoroŋ	goron	goruan	goroŋ	庭	(3a, b)
qetʃie-	—	—	quɖʒi-	出て ¹⁴⁾	
kie-	giə-	giə-	giə-	する	
B 有聲		有聲	無声		
pugutu-	—	(pugudusanni udu)	pukutu-	曇る	(4a, b)
tungulie-	—	—	tuŋkuliə-	音がする	(5a, b)
—	—	tungu-	tuŋku-	押す ¹⁴⁾	(1a, b)
C 有聲	有聲	無声	有聲		
pudʒa	pudʒa	puɖʒa	pu/urɖʒa	豆	(4a, b)
—	pudu	putu	pudu	堅い	(4a, b)
D 有聲	無声		有聲		
tuɣu	tuxua	—	tuɣ(u)ə	柱	(2a, c)
E 無声	無声	有聲（無声）	無声（有聲）		

tosun	tosun	d/tosun	t/dosuŋ	油	(1a, d)
F 無声	無声	無声	無声		
quaitʃun	quaitʃun	quaitʃən	quaitʃəŋ	古い	(1a)
quʃun	—	quʃun	quʃuŋ	苦い	(4a)
G 有声	有声	有声	有声		
kugie	kugiə	kugiə	kugiə	青い	(1b)
quŋi	quŋəi	quŋəi	qu(x)ŋəi	豚	(4b)
dʒuŋe	dʒuŋə	dʒuŋə	dʒuŋə	心臓	(4d)

A は Тодаева で無声音, それ以外で有声音 (ただし『蒙古語族語言詞典』は「硬い」については両方を示しており, 『東郷語詞彙』は「中」については両方を示している) で表されており, B は『東郷語詞彙』でのみ無声音, C は『蒙古語族語言詞典』でのみ無声音, D は『東郷語簡誌』でのみ無声音, E は『蒙古語族語言詞典』及び『東郷語詞典』で有声音～無声音のバリエーションが表記されている。

どうした場合にこういった不一致が起こっているかを吟味すると, モンゴル文語で無声音+母音+ (子音)+無声音または有声音+母音+ (子音)+無声音に対応する東郷語の第二音節の初頭に集中していることがわかる。

清格爾泰 (1989) にならって無声有気音を強, 無声化した有聲無気音を中, 鼻音と流音を弱と略記すると, 第一音節と第二音節の初頭 (ただし (6a) だけは語頭と語末) にモンゴル文語では九つの可能性があり, 東郷語では次のような対応関係がある。『東郷語詞彙』から例を挙げる¹⁵⁾。

モンゴル文語	東郷語
(1) 強—強	a. 強—強 (hantu「いっしょに」) b. 強—中 (kugiə「青い」) c. 中—中 (gogo「乳房」) d. 中—強 (t/dosuŋ「油」)
(2) 強—中	a. 強—強 (çiŋkiən「浅い」) b. 強—中 (tuŋoŋ「鍋」) c. 中—中 (gadasuŋ「釘」)
(3) 強—弱	a. 強—弱 (koləsuŋ「汗」) b. 中—弱 (goni「羊」)
(4) 中—強	a. 強—強 (piçiə「帯」) b. 強—中 (qu(x)ŋəi「豚」) c. 中—強 (bosuŋ「虱」)

- | | |
|---------|--------------------------------|
| | d. 中一中 (dzuxə「心臓」) |
| (5) 中一中 | a. 強一強 (tuŋkuliə-「音がする」) |
| | b. 強一中 (kidzəsuŋ「腸」) |
| | c. 中一強 (dzəŋqəi-「吞込む」) |
| | e. 中一中 (gadza「地」) |
| (6) 中一弱 | a. 強一弱 (qaŋ「火」) |
| | b. 中一弱 (guruŋ「小麦粉」) |
| (7) 弱一強 | a. 弱一中 (mɪxə「肉」) |
| | b. 弱一弱 (nokɪən「穴」) |
| (8) 弱一中 | a. 弱一強 (niŋkiən「薄い」, mutuŋ「木」) |
| | b. 弱一中 (noxoŋ「緑」) |
| (9) 弱一弱 | 弱一弱 (naraŋ「太陽」) |

問題となるのはこの主として (1) 及び (4) の場合である。しかし、この場合でも上述の F (全ての資料で無声音) や G (全ての資料で有声音) のように資料間で一致している場合もある。(3), (6), (7), (8) の場合、どれになるかは資料間で一致している。例が少ない (5a) は『蒙古語族語言詞典』、『東郷語詞彙』で共に語頭子音は無声であり、(8a) もここで挙げた四つの資料で全て第二音節の初頭は無声音である。

「堅い」は batu > patu > padu (putu) のように変化してきたものと考えられるので、第二音節が無声音の場合はより古い段階を示している。Тодаева の資料に古い段階を示したものが多く見られる。

註

- 1) 下位方言の違いは主として語彙的なもので、音声的には音節末の r の有無にすぎない。
- 2) Тодаева (1961) はロシア文字で表記されているので、次の括弧の中の表記に置き換える。これは Todaeva (1959) で用いられているものとは異なる。
a (a), б (b), в (w), г (g), ɣ (g̃), д (d), дж (dʒ), з (z), и (i), j (j), к (k), к (q), л (l), м (m), н (n), Һ (ŋ), о (o), п (p), р (r), с (s), т (t), у (u), ф (f), х (x), h (h), ч (tʃ), ш (ʃ), ы (ɯ), э (e)
- 3) 布和 (1985 : 45) にはさらに多くの語頭子音連続の例が挙げられている。
- 4) Kaschewsky (1963 : 261) にもこの最小対立が引用されているが、「水泡」が Schaumblase「気泡」,「膀胱」が Gallenblase「胆嚢」と訳されている。
- 5) 東郷族が居住している地区の周辺の漢語は臨夏方言であろうが、この方言の音韻に関しては、劉照雄 (1981 : 12), 布和 (1985 : 50, 247) が普通話の di, ti が dʒi, tʃi になることを述べている以外、詳細はわからない。比較的近い蘭州方言については、もう少し詳しい記述が得られる。黄當時 (1983 : 41) によると蘭州方言の調値、および二字連続変調は次のとおりである。

	下字本調	陰平 53	陽平 51	上声 42	去声 13
上字本調	上声 42	44-	44-	51-	44-
	去声 13	11-	11-	11-	22-

声調の対応については、詹伯慧著 (1983 : 56, 136) に記述があり、北京の陰平と陽平の一部が蘭州で去声に対応するのを除いて、両者の声調はほとんど対応する。

東郷語が普通話とは明らかに違った方言の形式を借用しているものには、次のようなものがある。

1. 普通話で母音で始まる次のような字音が n で始まる。

愛 (ai ⁴)	nai	安 (an ¹)	nan	按 (an ⁴)	nan	鞍 (an ¹)	nan
埃 (ai ¹)	nan	肮 (ang ¹)	naŋ	熬 (ao ²)	nau	鵝 (e ²)	no
恩 (en ¹)	nan	眼 (yan ³)	nian	芽 (ya ²)	nia		

2. l~n の混同が見られる。

量 (liang ²)	nan	臉 (lian ³)	nian
農 (nong ²)	luŋ	暖 (nuan ²)	loŋ

ただし、次のような語の混同のようすは蘭州方言とは少し異なっていて東郷語は普通話と同じである。

	普通話	蘭州	東郷語	
南	nan ²	l (n)	nanmian	南面
			naŋgua	南瓜
蘭	lan ²	l (n)	lantɕiu	蘭球
			laŋxua	蘭花
年	nian ²	l (n)	niantɕəŋ	年成
連	lian ²	l (n)	liandzaŋ	連長

3. 劉照雄 (1981 : 12), 布和 (1985 : 50, 247) に指摘されているように、東郷語の漢語借用語は臨夏方言の特徴を表していて、普通話の ti, di が tɕi, dɕi に対応する。

東郷語の漢字借用語には蘭州方言に見られる次のような現象はない。

	普通話	蘭州	東郷語	
注	zhu ³	pfuə	dzuji	注意
書	shu ¹	fu	ɕu	書

6) -daiɽn という形式は音節構造に違反している。他の資料でこの形式が見あたらないのでよくわからない。sunGu' nadaiɽn「葱のような」, tɕu' dɕədaɽn「花のような」という例が挙がっている。

形容詞についても副動詞と同様に、その直前にアクセントが来るが、主語になる場合は語末にアクセントが来る。後ろに ni が付く場合も語末にアクセントが来る。

那森伯 (1988 : 97) は現在時 -dzuwo, 過去進行時 -dzuo と区別しているが、他の資料では区別していない。Тодаева (1961 : 44-45) では現在形 -dzuwe, 劉照雄 (1981 : 62) では進行体 -dzuwo, 布和 (1985 : 165-166) では -dɕi wo と分かち書きして過去持続進行, 現在持続進行, 未来持続進行としている。

東郷語の馬忠山が語った謎々を東郷語調査グループが精密表記で記録し編集した『内蒙古大学学报哲学

社会科学蒙古版』一九八一年第二期72頁の東郷語謎語に見られる -dzuo という表記は、同じ謎々を再録した『東郷語話語資料』(pp. 319-328) では -dzj wo と分かち書きされている。

- 7) 阿・伊布拉黒麦 (1988 : 65-75) は p', t', k', q', tɕ' については音素として ' を記しているが、これは余剰的なのでできるだけ付いていない阿・伊布拉黒麦 (1988 : 138-156) の例から選んだ。
- 8) 布和 (1985 : 20) に /iau/ は開音節で iou, 閉音節で io となると記されているので、阿・伊布拉黒麦の分析も一理ある。布和 (1985 : 20) は uai は第一音節の開音節にしか現れないと述べているが、『東郷語詞彙』には dziaxuui 「貧しい」という第二音節に現れる語が記載されているので事実と矛盾する。
- 9) 拼音の ian は [ien] という音価を持っている。[ian~ian] に相当する音節はない。
- 10) 拼音では o は b, p, m, f の後のみ現れ、uo は d, t, n, l, g, k, h, zh, ch, sh, z, c, s の後及び音節初頭 (実際は wo) にのみ現れる。つまり o と uo は相補分布を成している。『蒙古語族語言詞典』の表記はこういったバリエーションを表しているにすぎない。
- 11) 動詞派生接辞が全て三種類の交替形を持つのではない。布和 (1985 : 260-261) に形容詞から動詞を派生する -sa という交替形を持たない接辞の例が挙げられている。
阿・伊布拉黒麦 (1988 : 146) には形容詞から動詞を派生する -la/-liə/-lu という三種類の交替形を持つ接尾辞が記されている。これは阿・伊布拉黒麦 (1988 : 145) に記されている名詞から動詞を派生する接尾辞 -la/-lo/-liə とは別のものである。布和は -lu を取り上げてはおらず、この両者の区別をしていない。-lu が付く例として阿・伊布拉黒麦が挙げているのは otiaolu- 「年をとる」であり、『東郷語詞彙』でも otɕiaulu- であるが、三種類の交替形を持つ例として -lu を挙げるのは不自然である。-Ca/-C(i)ə/-Cu というタイプはこれ以外にはない。形容詞を動詞化する派生接辞は語彙的に決まっていると考えべきであり、「年をとる」は特殊な場合である。布和 (1985 : 256) にも -gana/-gono/-kuliə という不自然な交替形が記されている。
- 12) 那徳木徳 (1988 : 57) には tuxən 「鍋」, suɣo 「盲」と記されているので『東郷語詞彙』と同様、無声子音 + 非円唇狭母音に後続した位置でのみ閉鎖音が現れるものと思われる。
- 13) 劉照雄 (1965) では語頭で母音の前に j, w を認めているが、劉照雄 (1981) では jan 「タバコ」と jawu- 「行く」以外は認めていない。しかし本文 (p. 14) では iawu- 「行く」となっているという不統一がある。また劉照雄 (1965) では ou, 劉照雄 (1981) では本文で ou, 語彙リストで əu を用いている。さらに ayun/ayən 「村」のような解釈の違いがある。また niadzui/iadzui 「芽」のような違い (臨夏方言／普通話) がある。
- 14) 阿・伊布拉黒麦 (1987 : 70) では tungu- 「押す」, qidzə- 「出て」となっている。
- 15) 清格爾泰 (1985) の「弱」は清格爾泰 (1989) の「中」のことである。ここでは清格爾泰 (1989) の表現に従う。清格爾泰 (1985) では東郷語も扱っているが、清格爾泰 (1989) では土族語東溝方言を主として扱っているので東郷語については扱っていない。土族語のナリンゴル方言に基づいてさらに詳しく分析したものに Hattori (1972) がある。東郷語についても扱っているものに佐藤 (1991), フフバートル (1992) があるが、佐藤が扱っているのは語頭のみであり、無声化は p しか扱っていないし、フフバートルは有声化 (軟声化) しか扱っていない。

参考文献

- 阿・伊布拉黒麦 (1988) 「東郷語音位」『東郷語論集』65-75
 阿・伊布拉黒麦 (1988) 「東郷語的構詞法」『東郷語論集』138-156
 阿・伊布拉黒麦記録, 整理 (1987) 「東郷語話語材料」『民族語文』一九八七年第三期 (総第四十五期) 69-79
 包力高 (1988) 「東郷語及蒙古書面語元音転音の対応」『東郷語論集』76-91
 布・哈・托達叶娃 (Todaeva, B.H.) (1957) 「研究中国各蒙古語和方言的初步総結」『中国語文』総第63期 32-40
 布和 (1983) 「東郷語の元音和階現狀探析」『民族語文』4 24-30
 布和 (1988) 「東郷語動詞“式”的一個形式 一附加成分 -mu」『東郷語論集』132-137

- 布和 (1988) 「東郷語詞彙初探」『東郷語論集』157-192
- 布和 (1988) 「東郷語の元音和階現狀探析」『東郷語論集』33-47
- 布和編著, 确精扎布校閱 (1985) 『蒙古語族語言方言研究叢集 007 東郷語和蒙古語』内蒙古人民出版社
- 布和等編 (1988) 『蒙古語族語言方言研究叢集 008 東郷語詞彙』内蒙古人民出版社
- 布和等編 (1986) 『蒙古語族語言方言研究叢集 009 東郷語話語材料』内蒙古人民出版社
- 甘肅省民族事務委員會 西北民族學院西北民族研究所編 (1988) 『東郷語論集』甘肅民族出版社
- 劉 照雄 (1965) 「東郷語概況」『中国語文』1965年度第1期 153-167
- 劉 照雄編著 (1981) 『中国少数民族語言簡誌叢書 東郷語簡誌』民族出版社
- 馬國良, 劉照雄 (1988) 「東郷語研究」『東郷語論集』1-32
- 那德木德 (1988) 「關於東郷語元音」『東郷語論集』48-64
- 那森柏 (1987) 「東郷語」中央民族學院少数民族語言研究所編『中国少数民族語言』四川民族出版社 630-643
- 那森柏 (1988) 「東郷語的詞重音」『東郷語論集』92-101
- 那森柏 (1988) 「東郷語蒙古語人稱代詞比較研究」『東郷語論集』102-125
- 清格爾泰 (1985) 「蒙古語塞音 q, k 的歷史演變」『民族語文』一九八五年第三期 1-10
- 清格爾泰 (1989) 「蒙古語族語言中的音勢結構」『民族語文』一九八九年第一期 28-36
- 孫 竹主編 照那斯圖 陳乃雄 吳俊峰 李克郁 編著 (1990) 『蒙古語族語言詞典』青海民族出版社
- 孫 竹 (1985) 『蒙古語文集』青海人民出版社
- 詹伯慧著, 桶口靖訳 (1983) 『現代漢語方言』光生館
- 黃當時 (1983) 「北方・西北官話の声調交替について」『外国語・外国文学研究』(大阪外国語大学大学院修士会) 7 39-52
- フバートル (1992) 「モンゴル語族諸言語における語頭子音の軟音化」『一橋研究』第17巻第3号 (通巻第97号) 141-166
- 一ノ瀬 恵 (1994) 「ドンジャン語の動詞形態法に見られる中国語の干渉 ―接尾辞型から孤立語型へ―」『北海道大学文学部紀要』XL II-2 (通巻第79号) 171-204
- 角道正佳 (1982) 「ドンジャン方言の音韻変化」『大阪外国語大学学報』59号 17-35
- 栗林 均 (1989) 「東郷語」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大事典』第2巻 三省堂 1281-1288
- 栗林 均編 (1986) 『『東郷語詞彙』蒙古文語索引』東京外国語大学
- 佐藤暢治 (1989) 「東郷語における家畜用語について」『日本モンゴル学会紀要』No. 20, 17-26
- 佐藤暢治 (1991) 「中国甘肅, 青海省のモンゴル系諸言語における語頭閉鎖音の軟音化と硬音化について」『日本モンゴル学会紀要』No. 22, 14-28
- 佐藤暢治 (1992) 「東郷語における指小辞 -u について」『日本モンゴル学会紀要』No. 23, 98-103
- Böke (1981) 'Düngsiyang kelen ü üyile üge yin tölüb ün nige kelebüri -mu daɣaburi yin tuqai,' *Öbür mongɣol un yeke surɣaɣuli yin mongɣol kele bičig sudulqu ɟaɟar un kele bičig ün erdem sinjilgen ü ügülel ün tegüberi* (dörbedüger debter) 111-114
(布和 (1981) 「東郷語動詞式的一個形式—附加成分 -mu」『内蒙古大学学报哲学社会科学蒙古版』一九八一年 第二期 111-114)
- Bu. Bulaɣ (1981) 'Düngsiyang kele kiged mongɣol bičig ün kelen ü jarim abiyan u tokiralçaɣa,' *Öbür mongɣol un yeke surɣaɣuli yin mongɣol kele bičig sudulqu ɟaɟar un kele bičig ün erdem sinjilgen ü ügülel ün tegüberi* (dörbedüger debter) 157-164
(包・保力高 (1981) 「東郷語及蒙古書面語某些元音的对应」『内蒙古大学学报哲学社会科学蒙古版』一九八一年 第二期 157-164)
- Hattori, Shirô (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Developments —with Two Additional Remarks—,' *Science of Language*, Tokyo Institute for Advanced Studies of Language『言語の科学』東京言語研究所 第3号 63-92
- Kökebars (1981) 'Düngsiyang kelen ü olan toɣan u -ɟiɟla daɣaburi,' *Öbür mongɣol un yeke surɣaɣuli yin mongɣol*

kele bičig sudulqu ɣaʃar un kele bičig ün erdem sinjilgen ü ügüel ün tegüberi (dörbedüger debter) 83-86

(呼和浩特 (1981) 「東郷語的複數附加成分 -ciəla」『內蒙古大學學報哲學社會科學 蒙古版』一九八一年第二期 83-86)

Kaschewsky, Rudolf (1969) 'Neuere chinesische Aufsätze zur Zentralsienkunde III (mit einem Glossar chinesischer linguistischer Termini) *Zentralasiatische Studien der Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 3, 257-287

Todaeva, B.H. (1959) 'Über die Sprache der Tung-hsiang,' *Acta Orientalia Hungaricae* 9, 273-310

??? Dünŋsiyan ündüsten ü onisuɣa nuɣud, *Öbür mongɣol un yeke surɣaɣuli yin mongɣol kele bičig sudulqu ɣaʃar un kele bičig ün erdem sinjilgen ü ügüel ün tegüberi* (dörbedüger debter) 72

Тодаева, Б. Х. (1960) Монгольские языки и диалекты Китая, Издательство восточной литературы, Москва

Тодаева, Б. Х. (1961) Дунсянский язык, Академия наук СССР, Институт народов Азии, Издательство восточной литературы, Москва

(1995. 5. 10 受理)